

峻秀院 釈 雪岳（政信）

峻照院 釈尼 至浄（美代子）

釈 俊正（秀夫）

釈 久願（久美子）

浄土真宗による西川家の葬儀葬送マニュアル

釈 俊正（秀夫）記

仏事（葬儀や年忌法要なども含む）は、故人をしのぶとともに自らも仏法を聴聞し、仏恩に感謝する行事として行われるべきものである。宗祖親鸞聖人自身、「父母の孝養のためとて念仏申したること、いまだ候はず」（歎異抄）と亡き人への追善、追福の供養のために念仏をとなえたことはないと述べている。縁ある命を真実世界（浄土）へと導くためには、まずもつて、この私が仏となる道を歩むことが肝要である。その意味で、仏事は、阿弥陀如来のお慈悲を仰ぎ、本願力に感謝し、仏法を聞く縁としてのぞむべきである。その意味に置いて、葬儀も、亡き人にお別れし浄土にお送りするという葬送儀礼としてではなく、阿弥陀仏の願力（本願力）によって、再び浄土で会えるという思い（それを「信心」という—信じるから信仰なのである）を確かめ合う法会である。私は若いときより仏縁により浄土真宗を信じるがゆえに従来の葬儀を、できるだけ私なりに昇華して私の家の葬儀では、遺族や親族をはじめ参列者全員が読経念仏することによって仏縁にあう機縁の場とするように改革（イノベーション…蓮如聖人は「イノベーション聖人」と言われたと記憶するが）実施するために、このマニュアルを記すものである。なお、このイノベーションを実施しようと思った背景には、秀夫、久美子とも勤務先等の関係から弔問客も多くあり、従来の葬儀社方式の葬儀を多く見てきたなかで、参列者も単に葬送に参加しているだけで、真実仏法をあるいは仏縁を感じておられるのか疑問に思っていたところ、滋賀教区仏壮連盟の大会で（平成15年6月赤野井別院に於いて）本願寺布教使 久堀勝敏さん（奈良市）より「正信にいきる」という講演を聴き、（寺は死人のためにあるのではない、生きている人のための仏法を聞く場であるという言葉聞いて）心に期す（思う）ところがあり葬儀のあり方についても、私なりに変えてみようと思い立った次第である。そのため、私としては、画一的な通常業者がされるている形式的な葬儀をしないと決意して、自分の生き方や信条から自分らしい形の葬儀・葬送のかたちを模索し、通夜と葬儀は「家族葬」とし、故人のお別れ会については、お寺で「偲ぶ会」を開催することを現時点では選択したことを付記しておく。あくまでも、葬儀葬送は信仰の問題であり、幸いにしわれらはすでに法名をいただいた者ばかりであり阿弥陀如来の仏願を信じて生きているゆえに、賛同をしてもらえると信じるものである。我々はすでに浄土に入ることが約束されているため、故人の冥福を祈ったり、故人の靈魂の安らぎを祈る慰霊の場としてでなく、仏の言葉を聴聞し信仰を喚起する場として葬送の場を捉えていきたい（再構築を）と願うものである。なお葬儀の形態としては、家族葬（密葬）とお別れ会（偲ぶ会）の二本立てで行う。（2005,6 記）

危篤・臨終

【危篤】時

危篤とは臨終直前のときをいう。したがって、医師から危篤を告げられたら、家族は、できるだけ早く近親者や友人・知人に連絡をとり「最後の別れ」をしてもらう。

近親者の範囲は普通は三親等まで。

政信の場合……・西川秀夫(31-3001)、武志、瑞恵、義起、西村紀美子

美代子の場合……西川秀夫、西村紀美子、堀尾多津子、東純市、中川智恵子

秀夫の場合・・・西川久美子、武志、瑞恵、義起、西村紀美子

久美子の場合・・・西川秀夫、武志、瑞恵、義起、岩井喜代子、山添美能留

【臨終】時

○病院で亡くなった時…医師に死亡診断書（死体検案書）を書いてもらう

自宅で亡くなった時・・・掛かりつけの医者をおき死亡診断書を書いてもらう。

自宅に搬送する・・・霊柩車を使わなくても自家用車でもよい（死亡診断書要持参）

○遺体の病院での清拭（せいしき）・・・遺体をアルコールで消毒し整える。化粧を施す。
一般に清拭（湯灌）は有料

○末期の水・・・臨終に立ち会った人全員が「死水（死者の口に捧げる水）」をとり、死者に別れを告げる。

○遺体の搬送（宅下げ）・・・自宅への搬送は霊柩輸送事業の許可をもった霊柩車（通常バン型）で行う。遺族が自家用車で搬送することも可能だが、死亡診断書の携行が必要です。

遺体はシートでくるみシートごとストレッチャーに乗せる。遺体を車に入れるときは頭部を先頭にする。搬送の際は体液が漏れていない等を確認点検し整える。この際必ずゴム手袋を着用する。

○遺体を仏間に安置する。

遺体は顔を白布で覆い、両手を胸の上で組ませて念珠を持たせる。敷布団や掛布団は白で清潔なものを使用する。納棺するまで、家の間取り具合と仏壇の位置で北枕にする。腐敗が進まないように暖房を切り、敷布団と掛布団は薄いもの1枚にする。

仏壇を荘厳する・・・灯明・香を焚く。

大房町金照寺(33-3406)住職に連絡する・・・臨終勤行（枕経）を依頼する

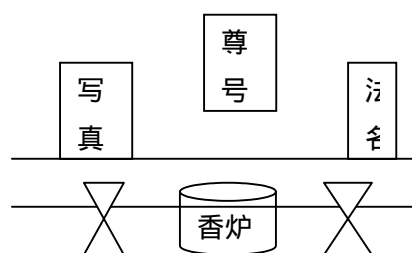
* 本来は臨終を向かえる人が息のあるうちに行うものである。（参考程度）

* 臨終勤行・・・家族遺族全員で行う。このとき法名・遺影や荘厳の仕方について確認しておく。

* 通夜式・葬儀式および偲ぶ会の日時・進行について住職・親族を交え打ち合わせをしておく。

○ 臨終勤行・・・枕経ともいうが枕元でお勤めしない。必ず仏壇の前で行う。仏壇に「法名」

を出す。



○ 納棺

納棺するまえに遺体をぬるま湯かアルコールで清める。女性なら薄化粧をしてあげる。服装は故人が愛用していた服を着せる。死装束・六文銭・塩・守り刀は必要なし。むしろ故人愛用の真宗聖典や念珠を入れる。門徒式章は懸けてあげる。ただし念珠のプラスチック類やガラス類は入れないこと。眼鏡も同様にプラスチック・ガラス類は入れないこと。着物の左前や逆さ屏風、旅仕度はしない。

○お棺の種類・・・天然木棺 フラッシュ棺 布張棺 ダンボール棺とあるが、予算と相談する。棺の装飾にも彫刻棺、R 棺、印籠棺とあるので、そのときになってから、家族の意見と価格表を見て決めればよい。

○法名・・・いずれも持っている。(確認済)うちのお寺は戒名はいらない。墓標名は住職に書いてもらう・・・依頼のこと

○業者への依頼

葬儀のスタイルを伝える・・・棺と火葬場に行く時の霊柩車のみ頼む。毛せん・テント・祭壇飾り付け等は必要ない。

必要なもの・・・お棺、遺影、霊柩車(寝台車)、墓標、骨壺、

葬儀業者は、この葬儀スタイルを理解し協力してくれる業者。画一的葬儀を強請する業者は避ける。

葬儀式の火葬場までの搬送等について打ち合わせておく・・・手段・・・マイクロバス? 自家用車で行くのかなど。

○喪主・施主を決めておく・・・喪主は名目的な責任者。施主は実質的な責任者。通常は世帯主以外が死亡したときは世帯主、世帯主が死亡したときはその配偶者または子供とする。

○届出・・・近江八幡市役所市民課で行う

死亡届・・・7 日以内 届出義務者は同居の親族、使者は誰でもよい。届出義務者の印鑑を持っていくこと。そのとき医師の死亡診断書(死体検案書)が必要。

埋・火葬許可証・・・死亡届と一緒に手続きをして、許可証を受け取る。時間はいつでもよい(ただし 24 時間後・・・埋葬・火葬は死亡後 24 時間以内はできない。)

○通夜返礼品、会葬返礼品(粗供養)、香典返しについて

供養品(香典含む)は死者の減罪を願って行われる布施のひとつで、死者の供養につながるという考えからであるが、死装束・六文銭と同様死者に対しては必要のないものであ

るとの考えから供養品はすべてお断りする。仏壇荘厳への飾りは家族で用意する。

ゆえに、供養品（香典含む）を持って来られることをお断りすることから、通夜に弔問に訪れた人への返礼品、葬儀の会葬者への返礼品、香典返しは、一切しないこととする。

もし通夜・会葬に来られた方があれば、記帳と焼香だけしてもらい、お帰りを願う。後日「偲ぶ会」をする旨の案内状兼焼香の礼状をお渡しする。

* 焼香や偲ぶ会に来ていただいた人には、忌明けの礼状を出す。・・・忘れないように！

通夜式

【通夜】時

近親者のみで行う・・・知人、ご近所さんは呼ばない。会社関係の弔問会葬もお断りする。最近多くなってきたのが、この「家族葬」といわれるもので、形式としては特に決まったものがあるわけではない。

遺族や親族だけで集まって行うもので義理で参列する人がいないので、ゆっくりと故人を偲ぶことができる。

○ 通夜のおつとめ（質素に自宅・仏間でする）・・・祭壇は設けない。遺影は飾る。

* 必ず仏壇の前でする。・・・仏壇の荘厳の仕方については門徒必携（赤本）を見る。

阿弥陀経、正信偈、を住職と一緒に拝読する。・・・焼香は喪主、遺族、親戚の順にする法話をみんなで聞く。

* 法中（住職以外の他寺の僧侶）は呼ばない

香儀・香典受付、参列者への通夜ぶるまい、供養配布はなし・・・喪主が親戚参列者に感謝の言葉を述べる。

故人の手紙を読む・・・事前に書いてもらっておく。浄土に参ることを喜ぶ内容とする。

○ 通夜の服装・・・黒の喪服にこだわる必要はない。念珠と式章があればよい（必携）。黒の腕章も必要がない。

○ 通夜の進行

家族親族一同着席→導師着席→読経→焼香→導師法話→遺族挨拶→身内だけの通夜振る舞い（すし盛り合わせ）→自由散会→遺族が遺体を守る

* 灯明・香は絶やさない

○ 声をかける遺族・親戚等

政信の場合・・・

美代子の場合・・・

秀夫の場合・・・

久美子の場合・・・

○ 弔問客への対応

家族葬であることを案内していても弔問客が参列する場合がある。そのときに備えて、玄関前に受付を設け、香儀香典は受け取らず辞退し、焼香だけお願いし、帰ってもらう。そのとき、葬儀式への一般弔問客参列辞退と「偲ぶ会」への招待案内状を渡すようにする。

葬儀式

【葬儀式】時・・(簡素に身内・親戚で行う)・・・家族葬

- 基本的に声をかけるのは、遺族・親族とする。ご近所さん、会社関係、知人は別に設ける「故人を偲ぶ会」に参加してもらうように案内する。
- なお一般の会葬に参列するのは自由とするが、受付場所は設けないし、香儀・楮(シミ)等は受け取らない。一般会葬者のための焼香場所は設けておく(通夜式と同じように)生花や花環などの供花もお断りする。

○ 自宅仏間で行う・・・葬儀の進行

一同着座→導師入堂→開会の辞→葬場勤行「正信偈」「和讃」→導師焼香→遺族焼香→会葬者(あれば)焼香→導師法話→導師退堂→喪主あいさつ→閉会の辞(遺族代表)

- 葬儀のおつとめ後・・・出棺前にお棺(柩)に花を入れてお別れの儀をする。

出棺に際しての参列会葬者への挨拶は喪主が簡単に自分の言葉で挨拶する。

火屋勤行(遺体を火葬にするときに行う)・・・重誓偈

収骨勤行(遺骨を拾うときに行う)・・・・讃仏偈

還骨勤行(遺骨を家に持ち帰ったとき)・・・阿弥陀経、御文章(白骨の章)

* この還骨勤行(回向)のときに、初七日の法要を繰り上げて行うのが一般的だが、家族や住職と相談していく。本家では「偲ぶ会」を考えていることを伝える。

* 出棺から火葬場まで行く人

政信の場合・・・

美代子の場合・・・

秀夫の場合・・・

久美子の場合・・

* 火葬場へもって行くもの・・・念珠、聖典、式章、遺影、凵、香その他三具足などが
必要か等で仏具については住職と打ち合わせておき、事前に借りておくこと。

* 用意するものは・・・

- 出棺の際に位牌は必要なのか・・・住職に相談

霊柩車までの柩の搬送は故人と関係の深かった若い男性がする。非日常的な習俗にはこだわらない・・・仮の門を設けて出棺。出棺時に茶碗を割る。逆縁の場合親は火葬場に行かない。玄関でなく縁側・窓から出棺する。・・・これらは浄土真宗ではあえてしない。火葬場への往路と帰路の道を帰る必要がない。あえて合理的に考えその場で対処されたい。

○葬列（葬式行列）は用いない

供物、提灯、墓標、は参列なし。三具足と遺影、お棺が最低あればよい。自宅前から霊柩車や自家用車に乗って火葬場に行く。

○拾骨（骨上げ）の作法

一人が箸で持った遺骨を順に次の人に渡す。二人一組で遺骨を拾う（竹と木の1本づつ、竹2本、木2本、男女ペアで拾う等々）いろいろな作法があるが、箸渡しは、三途の川を渡すという意味があるらしい。だけど浄土真宗ではすでに阿弥陀如来の本願力によって救われているのであるから、意味がない。だから作法にこだわる必要がない。要は遺骨を拾えばよい。そのとき関東では全部拾骨で、関西では喉仏など一部拾骨が一般的だが、我が家では全部拾骨をお願いする。全部拾骨の場合は、脚、腕、から順に頭部まで拾い、最後に喉仏（白骨）を拾う。一部拾骨だと残った骨はゴミとして捨てられるため遺族としては偲べないため。

○埋・火葬許可証を受付で渡したあと、火葬場での拾骨がすんだら、火葬済の認証のついた許可証を忘れないように貰うこと。・・・遺骨を埋葬・分骨するときに必要である。

○火葬場から帰ってきたらお斎（とき）をする。

お斎とは、別派仏教では精進落としとも言われる宴席（なおりい）のこと。決まった形はないが住職を上席にして遺族は末席に位置する。

○後飾り（中陰壇）

拾骨後自宅に戻り、遺骨を安置する場所を後飾りという。遺骨を後飾り祭壇に安置し法要をできるようにする。

一般的には・・・小机に白布を掛け、三具足（燭台、香炉、花瓶）に遺骨、位牌？、遺影が乗せられるようにしたもの。

通常は、上段に遺骨を置き、その前に位牌、下段に遺影を置く。遺影の前には中央に香炉、向かって右に燭台、左に花瓶を置く。設置場所は、仏壇の正面をはずした前か横とする。

遺骨・毛髪を仏壇の下段または床の間においてもよく、仏壇の打敷は白地のもの。花はシキミを供えます。

【遺骨の埋葬・分骨】

墓標と遺骨（骨壺）を持って、住職とともに大房の墓地に行き遺骨を埋葬する。

埋葬勤行・・・

○墓地まで行く人・・・

*墓地や火葬場から帰ってきても清め塩はしない。

- 持参する仏具、埋葬道具

墓標、鋤、鍬、花、香、蠟燭、三具足

- 大谷本廟への納骨

本当に分骨・納骨が必要なのか、住職と遺族で話し合う。そのうえで結論をだす。

49日の法要の後、数年の間にお別れの法要を営み、宗祖親鸞聖人のおそばに納骨すること

- 年回法要

浄土真宗においては亡き人の命日を縁として、仏縁仏恩を喜び、仏徳に感謝することである。

故人を偲ぶ会

【故人を偲ぶ会】を行う・・・盛大に・・・金照寺本堂にて行う。

- 追善というよりも、故人の遺徳を偲び、人生の意義について考える法縁とする。

故人の略歴、業績紹介などの資料を用意しておく。当日袋に入れて配る。

故人に生前からこのときのあることを予想して手紙等を書いてもらっておく。

- 中陰の期間内に、参列者が集まりやすい日時（土日曜日など）を設定する。
- 講師には、住職だけでなく他の布教使もお願いする。・・・3人ぐらいの法話を設定する。
＊法話の内容や人選は故人の希望を生前から聞いておくこととする。お題を張り出す。

- 遺族、親族、知人、ご近所、会社関係の方も、ご案内（参拝依頼）する。

はがきで案内文印刷・・・駐車場も考えておく。駐車係りは知人に協力依頼する。

はがき文面は事前に考えておく。・・・必要なら通夜式、葬儀式に配布できるよう手配する。

- 参拝記念品を用意する・・・腕輪念珠、
- 本堂にてお茶を用意する・・・ペットボトル茶、茶菓子

知人等から故人が好きだった食べ物やエピソードを語ってもらう。その際、故人が日常愛用していた物や趣味の品、あるいはスナップ写真を展示するなど工夫をし、集まった人にいい思い出となり、故人を送るにふさわしい会となるようにする。

- 僧侶を交えて、知人、家族、親族が故人を語る場（時間）を設ける。
- 音楽、献花など演出にも配慮する・・・「偲ぶ会」の最初と最後は音楽法要を取り入れる。
献花献灯は子供で検討する。
- 偲ぶ会は家族・遺族主催とするが、故人・西川家への香典（仏前）は受け取らない。
参拝者が持参した「上」はお寺への布施とする。・・・香典ではなくお寺への「上」とすることを参加者には案内しておく。

【中陰】満中陰（49日）までは七日、七日ごとに仏壇にて正信偈を拝読する。

自宅・・・仏壇で遺族・親族にて行う